

「時間に埋もれた存在」を探す旅：山村由紀『記憶の鳥』『風を刈る人』『青の棕櫚』解説

著者	雛 乃馨
雑誌名	平安女学院大学研究年報
号	20
ページ	94-105
発行年	2020-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00002417/

「時間に埋もれた存在」を探す旅
— 山村由紀『記憶の鳥』『風を刈る人』『青の棕櫚』解説 —

鄒 乃馨

平安女学院大学研究年報 第20号 抜刷

(2020年3月)

「時間に埋もれた存在」を探す旅

— 山村由紀『記憶の鳥』『風を刈る人』『青の棕櫚』解説 —

鄒 乃馨*

要 旨

本稿では山村由紀の3冊の詩集について分析・考察する。第1詩集『記憶の鳥』においては、「自然界へのアンテナを有していること」「時間の中に埋もれてしまった存在への目線が感じられること」という2つの特徴がみられ、それらは互いに緊密な関連を見せている。第2詩集『風を刈る人』では前詩集に見られた「時間の中に埋もれてしまった存在への目線」が「生命への挽歌」へと発展し、その思想が「日常風景へと潜入」し、いっそう現実的な舞台の中で命が悼まれる構造を読み取れる。第3詩集『青の棕櫚』の中では、「叙事から抒情への転換」「生命との再会」が見られる。詩人が心内に持つ痛みを熟成させ、静かに表出した作品群を読むことで読者は、忘れかけた自分自身の記憶を蘇らせ、自分と向き合いながら、生と死に関する思索の旅に改めて歩み出すことが可能になる。

〔キーワード〕 現代詩 死生観 表現

はじめに

筆者は、大学院において太宰治『斜陽』を中心として研究を行ってきた。それは無頼派作家の太宰治の集大成的な作品である。価値観が音を立てて崩れゆく混乱の時代において、運命に翻弄される貴族という存在をデカダンスな作風で表している。没落していく貴族一家の4人の中、私生活においては墮落し、下降志向を示す上原と直治という2人もいれば、本物の貴族である母と良妻賢母主義に縛られずに革命者になろうと上昇志向を持つ和子もいる。ネガティブとポジティブの両面が含まれる独特な書き方という点に強く心を惹かれたのであった。

平安女学院大学と厦門大学嘉庚学院との間で締結された派遣教員システムに沿って、筆者は2019年度日本に滞在した。その際にも、中国語を学生たちに教える傍ら、引き続き太宰治について研究しようと考えていた。しかし平安女学院大学で日本近現代詩に関する講座¹⁾が開かれており、女子大学生に混ざって聴講の機会を得たことで少し気持ちに変化が現れてきた。その講座でテキストとして用いられていたアンソロジー『豊潤な孤独』²⁾の中には草野心平・宮沢賢治・高見順・伊東静雄・尾形亀之助・嵯峨信之・谷川俊太郎などの有名な詩人たちとともに木坂涼・細見和之・荒川純子などの現在も活躍中の詩人たちの作品も収められていた。毎週のように詩に触れる中でこれまで積極的に触れてこなかった詩の世界に目が開かれる思いがした。

筆者の母国中国では詩、特に漢詩は芸術性の高い表現形式の一つとしてよく知られている。筆者も小さいころから国語の授業で多くの有名な詩を勉強した。もっとも人生経験の浅さからか、教師から教わった詩の文面を丸暗記することしかできなかった。想像力を駆使し、詩の裏の意味などを繰り返し吟味することもなかった。「不惑の年」の段階にある今、徐々に実感を以てその内容が思い起こされることがある。漢詩は古人が知恵を絞った結晶であった。古い詩を通して、過去を知ることができ

*：中国厦門大学嘉庚学院・日本語言与文化学院

る。しかし、過去にこだわりすぎると、未来は却って見えなくなる。それで太宰治研究は一旦横に置いて、日本で研修を行う証として、最も現在に近い作品から日本の詩の世界に切り込んでみようという気持ちが湧いてきた。どの詩人から切り込もうかと考えた時、上述のアンソロジーの著者である山村由紀に焦点を当ててみたいという気持ちになった。彼女が編集したそのテキストには、詩人たちの生と死をめぐるさまざまな作品が掲載されていて、本質的な力を感じたからである。また、このアンソロジーを通して日本の近現代の詩における表現の幅広さを教えられたからでもある。このように幅広い視野で作品を選ぶことのできる詩人とは一体どのような書き手なのだろうか。筆者は徐々に関心が高まってきた。彼女の3冊の詩集の分析から私自身の、日本現代詩への研究を始めたいと思う。

0. 山村由紀とは誰か

山村由紀は1967年、山口県下関市綾羅木にて三姉妹の長女として生まれている。3歳の時に大阪の天王寺に引っ越しているが、春・夏休みには必ず山口に長期間帰省していたという。井戸や土間のある田舎暮らしと、高度成長期の変化の激しい都会の生活を交互に経験したことは、彼女の作品に強く影響している。1988年から看護師として働く。1990年代の後半から現在まで変わらず大阪を拠点として詩的活動を継続している。2008年に彼女によって編まれた先述のアンソロジー『豊潤な孤独』のあとがきには次のように書かれている。

看護師の道を歩き始めた高校生の頃、私は同時に詩の世界にも触れ始めていました。学生時代は夏休みの退屈な時間に気に入った詩をぼつぼつ読んでいました。働き始めると、今度は日々の仕事のプレッシャーから逃れたいときに本を開いていました。初めて配属されたのは呼吸器科の病棟で、毎日のように人の死に直面している仕事を続けていくには、読むことや書くことを続けていないとバランスを崩してしまいそうな、そんな時間が長いことありました。

大阪は高槻にある日赤病院に勤めた後、東京の日赤に勤務。その後帰阪して以降、茨木市内を転々とした。書くことが好きで医療系の出版社に勤めていたこともある。このころ出版社で知り合った画家の市居みか(彼女はあとに絵本作家となるのだが)と『絵ことば展』を開催するなど積極的に詩の準備運動とでもいうべき活動を始めている。本格的に創作を開始したのは大阪文学学校に関わってからで、そこで木澤豊、松本衆司、村岡真澄、高階杞一などの書き手に出会っている。「方外」「あにまる。ラヴ」などの同人誌活動を始めたのもそのころからである。

2001年になると「Lyric Jungle」³⁾の創刊に関わる。12号まで共同編集。10号は当時のメンバーの写真と作品を合わせて掲載したユニークな特集号で、彼女の単独編集である。以降「Lyric Jungle」に関しては編集協力という形で一歩退いたが、別に属していた「風箋」⁴⁾が「詩杜」⁵⁾と名称を改めて再出発するに際して運営のメンバーとなり実質的に一人で当該雑誌の編集の任に当たっている。

既刊詩集としては『記憶の鳥』⁶⁾『風を刈る人』⁷⁾『青の棕櫚』⁸⁾そして本稿執筆時点で新詩集を編集途中である⁹⁾。また、詩集以外では前掲の『豊潤な孤独』がある。これは「看護師が集めた生と死を巡る詩作品のアンソロジー」であり、彼女自身の死生観に深くかかわっている。

また、この世代としては早い時期からインターネットの詩に関わっていて、ホームページやブログを通して、日々の話題を提供している。月例読書会「知る詩る」も主宰しており、精力的に近現代詩の読者を切り開く努力を続けている。彼女自身は尾形亀之助、菅原克己、宮沢賢治、村上昭夫などの詩人を好んで読んでいるという。

1. 第1詩集『記憶の鳥』の特徴と可能性

(1) 自然界へのアンテナ

詩集『記憶の鳥』全体の特徴は(1)「自然界へのアンテナ」(2)「時間の中に埋もれてしまった存在への目線」の2点に大別することができる。これらの要素は両者は別々のものとして現れるのではなく、相互に緊密に関わっている。本節では冒頭作品「散歩」に即しながら、これらの特徴に関して考察をくわえてゆく。

<p style="text-align: center;">散歩</p> <p>みどりの色を なぞるように犬とともに歩いていくと みどりは少しずつ草になり みどりが草に変わりゆく姿に見とれていると いつのまにか わたしの身体も犬もみどりに染まる</p> <p>草は風の行く末を見つめ わたしもそれに倣って向きを変える 青が 遠い青が 見えたり 見えなくなったり 青に向かって犬が走り出す 青へ行く方法を知らないわたしは</p>	<p>草の上をジグザグに進み くりかえし犬の名を呼ぶ 青 青 青 ここまでおいでと 青の声 見えなくなる 犬</p> <p>草は 犬の名を呼ぶわたしの 足を撫で 笑いながらゆっくりと 再びのっぺりとした みどりへと 戻っていった</p> <p style="text-align: right;">(全文)</p>
---	---

上記の作品「散歩」の中では、緑の色と犬の姿が鮮明な画像として読者の眼に浮かび上がる。しかし「遠い青が/見えたり/見えなくなったり」する。「わたし」は犬の行方を追っていきたいと思うが「青へ行く方法」が分からない。「わたし」にはだんだん犬の姿が「見えなくなる」。緑の中の「散歩」とは、これ以上に気持ちを和ませてくれる場所はないだろう。しかし緑の草に囲まれる中、ありとあらゆるものが緑色に染められ、道までも分からなくなる。どれほどまでに濃い緑色なのだろう。まるでこの世の全ての緑のものが大きな鍋に入れられ、煮込まれた濃密な緑のようでさえある。

この冒頭作の特徴は、詩集全体に渡ってみられるものである。詩の舞台はどこか、という言い方をする時、例えば「家の中」「学校」「電車の中」というように私たちは考えがちである。しかし、この作者の考える詩の舞台の前提として、「自然」というものが存在することに注意しておかなければならない。「家の中」であろうが「学校」であろうが「電車の中」であろうがどこにいても、私たちは前提として自然、あるいは無限な空に覆われている果てしもない大地に棲息しているのである。詩の存在する空間もそうである。この色とりどりの大自然のどこかに詩は誕生する。先に筆者は山村の経歴について書いた際「井戸や土間のある田舎暮らしと、高度成長期の変化の激しい都会の生活を交互に経験したことは、彼女の作品に強く影響している」と記したが、この詩人の「自然」に対する描き方にはまさにその影響を感じることができる。

詩集『記憶の鳥』の中には自然界の要素が頻出する。詩「散歩」の緑色に対する描写もそうだが、続いて現れる詩「素足」の中にも「雨上がりの夜の庭に素足のまま下りる/部屋の明かりに照らされた細い草/その草がくるぶしあたりに触れて/さすようなかゆみを感じる」とある。夏の時期芝生の上にくつろぐ際の感覚が思い出される。草に刺されて、ちくっとするかゆみがリアルに感じられる¹⁰⁾。全体に緑が詩集に満ちているが「緑」だけではなく、「鳥」「砂ぼこり」「赤茶けた土」などさまざまな自然に詩人の眼は向けられている。

詩「満月」にも自然の描写が鮮明な形で現れている。普通と違う異様な月がここには描かれる。月

光にやさしく照らされている夜の、私と10歳の猫のストーリーがこの詩を形成する。10歳といえればかなりの老猫である。人間と猫はお互いにもたれかかりながら休みを取っている。「老いた」せいか、猫はもたれられるのがいやになり、「体をよじらせて起き上がり」、「窓際」のほうへ歩いて行く。これを読んで、人間誰でも嫌なこともあるように、猫にも嫌なことがあるだろう、と「自然」への愛情のようなものさえ感じられる。最後のシーンでは「満月」が出る。「濁った」満月。「濁る」という語が「月」と結合されることもありうると初めて知った。しかも、月は「2つ」もある。猫は2つの濁った満月を「こちらに向けた」。それが天にある月ではなく、老猫の衰えた目のことであろうとここで筆者はようやく気付いたのだった。猫は綺麗な目の持ち主というイメージが強かったが、この詩では、猫の目に対し、「濁った」という形容の言葉を用いている。艶から濁り、光華から暗淡。自然をありのままに描くということは時間が経過してしまう事の切なさをしみじみと思い知らせる。その意味で、ここに特徴の1番目として挙げた「自然界へのアンテナ」という特徴は、必然的に2番目の特徴である「時間の中に埋もれてしまった存在への目線」へと繋がってゆく。

(2) 時間の中に埋もれてしまった存在への目線

詩集を一読後、「時間の中に埋もれたもの」とでもいうべき存在のことが強く心に残った。色彩についても、生き物の名前も生活の痕跡も含めて—ともかく、消えてしまいそうでいながらどこか記憶に残っているものの存在を強く感じたのだった。目の前にあったり、触れることができたり、溢れんばかりになっていたりするけれども、実はなかなか近づくことが難しい、そういったものについてこの詩集は主題にしているのだということがよくわかる。冒頭の作品にもどれば、散歩に連れてきていたつもりの犬は時間の中で遺失品のように埋もれてしまう。草がただ何の罪もないかのように私の足を「撫で」ている。緑の中に埋もれてゆくことはあまりにも自然過ぎて気が付かないほどだ。そして、犬は失われ、永遠に私の手の中に戻ってくることはない。この構図は、先に述べた詩「満月」や「赤茶けた土 背の高い草」¹¹⁾などの作品にも共通して見受けられるものである。表題作「記憶の鳥」においても「夏草の濃い匂い」「西日」「光」などの自然とともに「鳥」が登場する。それは最初過去の時間に属する『鳥の図鑑』の中に埋もれたままになっている。しかし詩の終りの方で、「ゆっくりと立体的になりながら」「飛び」立つのだ。鳥は語り手と一緒にいる。支えているともいえる。この感覚が書き手をして草、青い空、月などの自然に目を向けさせる。それによって書き手も読者も救われるのだ。

2. 第2詩集『風を刈る人』への変化

(1) 「生命の挽歌」

第2詩集『風を刈る人』は(1)「生命の挽歌」(2)「日常風景への潜入」という特徴を持っている。前詩集『記憶の鳥』が(1)「自然界へのアンテナ」(2)「時間の中に埋もれてしまった存在への目線」を特徴としたことと比べると、より具体的・現実的になったという印象がある。この詩集を前にして、まずその表紙のイラストに目を向けた。地平線と並行している田んぼ。稲穂が軽く左に傾いている。風がやさしく触ってゆく。静かで薄い風が見える。どんな風に乗せてくれるだろう。風の向こうには誰が待っていてくれるのだろう。『風を刈る人』に入り、読むことにした。本節では冒頭作品「アンモナイト」に沿って本詩集の特徴を読み解いてゆく。

アンモナイト

真夏の午後、観光客になり
博物館に向かう

(高原で海の化石を守る管理人の静かなほほえみ
アンモナイトには夏の光が射し
草の影が映る渦巻きは時計回り
ジュラ紀白亜紀カンブリア紀
館内には深海の匂いが溢れ、
(死骸と化石の境界線はどこ？
哺乳類はいつごろ発生したのかさえ知らぬまま
誰かの化石の説明を盗み聞く
アンモナイトとオーム貝の違いについて

十五年前の夏、わたしはあなたのカルテの内容をすべて知っていました。けれど、あなたに伝えたいことはもう一箇所も残っていなかった。病歴は重く滴り、どの頁も濃んでいた。あなたは自分のことはなにも話さなかった。病状を訊ねることもしなかった。ただ、毎日わたしが外で何を見てきたかとても知りたかった。白い壁ばかり見ていると気がおかしくなるから、と乾いた唇であなたは笑った。大病院。あきらめるといふことは、ひとりきりで背後に洞窟を掘り進めていくことだ。

貝の断面に触れる。
かたちというさびしさ。

昨日は海に行ってきました。
あなたが執拗に質問するものだからわたしはそう答えました。ほんとうは言いたくなかった。単調な生活の報告だけではあなたは満足しなくなっていたのです。海岸を少し歩いただけですが、と答えるわたしの声をさえぎるかのようにあなたは「海!」「海か」「海かぁ」と目を細めて何度も、何度もくりかえしました。
海なんて僕には星とおんなじくらいまぶしく遠くなったなあ、
そう静かにつぶやき、それからは乾いた唇に行き先の報告をせがまれることはなくなりました。

出口では蜥蜴が黒くぬめりながら蔓草を伝い
草陰に隠れたあと鈍く光る
傾いたバスが遅れて停車場に滑り込み
火照った観光客を積んで街へ向かう

今宵も 深海になった館内で
アンモナイトは時計回りに螺子を巻き
あなたもわたしも少しずつ
ぎじりと 渦に絡めとられ
いつか 時代という大きな括弧に
とおく くくられるのだろう

(全文)

どんな命もいずれは消えて行く。生命の消滅は自然現象であり、更に万古常在の真理である。古今

東西文学作品の主題として永く描き続けられているものである。詩においてもその主題を外すことはできない。命への賛歌や滅びてしまいそうな命への名残惜しい気持ちをこの詩集『風を刈る人』からは読み取ることができるが、就中「アンモナイト」は別格である。

アンモナイトは言うまでもなく綺麗な螺旋状の花模様を持つ遠い時代の海洋生物(巻き貝)である。化石は遠い時代から現在へとタイムスリップしたものであるとも言える。時間の悪と善を生き生きと人に教える。詩中「真夏の午後、観光客になり/博物館に向かう/アンモナイトには夏の光が射し/草の影が映る渦巻は時計回り/ジュラ紀白亜紀カンブリア紀/館内には深海の匂いが溢れ/死骸と化石の境界線はどこ？」というフレーズがある。舞台は博物館。博物館に展示されることは、生まれてから、あるいは、作られてから、数千数百年経ないと叶わない。生命の栄枯盛衰の波、生きていた痕跡を人々に見せている。「あなた」と「十五年前の夏、私はあなたのカルテの内容をすべて知っていました。けれど、あなたに伝えたいことはもう一か所も残っていなかった。病歴は重く滴り、どの頁も膿んでいた。(中略)それからは乾いた唇に行き先の報告をせがまれることはなくなりました」という追想が作品に現れている。命とは一体何であろう。数千年後のいつか、博物館の化石になることもあるのだろう。すべての命は「時代という大きな括弧に/とおく/くくられるのだろう」という結果を避けることができない。「貝の断面」のような「寂しさ」とあるが、まさに「生命への挽歌」というこの詩集の本質がここに現れている。

詩集『風を刈る人』は全体に「生命への挽歌」という要素を感じさせるものが多い。他にも表題作「風を刈る人」¹²⁾や詩「臨海学校」¹³⁾詩「星の一生」¹⁴⁾などにも強くその要素が滲み出ている。叢に、野原に、暗黒の中に、風の中に誰かがいる。衰えていく命、忘れかけている過去への思いを蘇らせてくれる詩集である。生物はいつか化石になるかもしれない。死んだ人は生き返らせることもできない。風を刈る人は、稲を刈っても豊穰な収穫を得ることができないかもしれない。それがわかっている、思念と祈りは絶えることはない。それによって人は前へ進むことができる。風の向こうの端にある人、モノ。この詩集では世界にそれを届けようとしている。

(2) 「日常風景への潜入」

第2の特徴として挙げた「日常風景への潜入」は、この詩の構造自体がそれを如実に表している。「生命への挽歌」を強く思わせる博物館を舞台にした散文形式の部分に、ふと日常風景を強く意識させる回想シーンが紛れ込んでくる。あるいは、語り手自身が「潜入」してゆく。すでに述べたように書き手である山村由紀は、長年看護師として勤務しているが、博物館への訪問が非日常的であるのに対して、散文形式で挿入された部分は彼女自身の日常に近い。「非日常」から「日常」へと詩は、書き手は潜入してゆく。

詩集『風を刈る人』では、前詩集に比して自然だけではなく人間の日常生活への眼が更に研ぎ澄まされている。「梅雨」¹⁵⁾「波の音」¹⁶⁾「家族」¹⁷⁾などに顕著にこの傾向がみられる。

山村由紀は第1詩集『記憶の鳥』から第2詩集『風を刈る人』へと移る中で、「自然」から「人」へと視線を転じた。この詩集の中では人間が主役になっている。相変わらず時間は人を待つことなく容赦なく流れる。しかしそのような自然の中から生活に「潜入」し行動する、前に進む。そうすれば「風も刈れる」。詩集『風を刈る人』の中で「人」は主役になったのである。

3. 第3詩集『青の棕櫚』と怪

(1) 叙事から抒情への転換

この第3詩集『青の棕櫚』においては(1)「叙事から抒情への転換」(2)「生命との再会」という大きな特徴を見出すことができる。本節では、表題と密接な関連を持つと思われる「棕櫚の葉」の分析

を通して本詩集の特徴を考察する。

棕櫚の葉

見舞いに来たわたしに缶コーヒーを差し出してくれた叔母は 来てくれてありがとう と小さな声で言うものの、久しぶりの再会に表情は硬く緊張しているのがわかる。精神病棟の面会室。開かない窓がついているだけの簡素な部屋。窓の近くの棕櫚の木が強い風に吹かれてゆれている。特に大きな出来事も共通の話題もなく、わたしは放つ言葉の切れはしを喉の奥で探している。

棕櫚の木は叔母が入院するまで住んでいた団地の庭にもあった。あの頃、この直線的に伸びる大きな木を庭に植えている家が多かった。高度成長期の流行だったのか。大きな手のような葉が何本も生えている木。あの大きな手は団地の部屋にいた叔母を音も立てずにかからめとっていった。周囲が気づいて慌て出した時には棕櫚の葉の固い柵に囲まれ、時々微笑むだけのひとになっていた。

「叔母さんはコーヒー飲まんの?」。叔母は少し微笑む。「さっき飲んだけえ、もういいのよ」。叔母の表情が和らいだことで気が楽になる。葉のこちら側に少しでも戻って来てくれたらと次の会話を考える。

その時 ふいに突風が吹いた。
わたしは反射的に立ち上がり
窓の外で光りながらしなる木を見た。

ふり向くと
叔母の顔には
尖った棕櫚の葉の影が
黒く貼りついてた

前半部は散文詩形式、後半に行分けの形式が採られている。「私」は「叔母さん」を見舞う。おそらく叔母は単身、病院で治療を続けているのだろう。「見舞いに来た私に缶コーヒーを差し出してくれた叔母は来てくれてありがとう/と小さな声で言う」という描写からみると、彼女はまだ動くことができる。「久しぶりの再会に表情は硬く緊張しているのがわかる。精神病棟の面会室。開かない窓がついているだけの簡素な部屋」という記述が見られる。どことなくばつが悪い感じがよく伝わってくる。その場面で「棕櫚」の出番が来る。棕櫚はまるで「私」と「叔母さん」のやり取りの媒介となっているかのようだ。記憶の中の「棕櫚」の木、窓の外揺れている「棕櫚」の木、話が詰まって、次の話すタイミングを教えてくれる「棕櫚」の木。最後は「突風が吹いた」。「振り向くと」「尖った棕櫚の葉の影が/黒く張り付いていた」「叔母の顔」が見えた。ごく平凡な生活的一幕への叙事であるが、「黒く張り付いていた」「棕櫚」の存在によって「尖った棕櫚の葉の影が黒く張り付いてた」「叔母」さんの顔は忘れられない存在になるだろう。語り手と叔母との強い心的繋がり¹⁸⁾が強く読者に印象付けられる作品である。

(2) 生命との再会

第1の特徴として(1)「叙事から抒情へ」という要素を挙げたが、もとより叙事は詩の目的ではなく、抒情の手段に他ならない。詩を通して、遠ざかっていった人のことを書く。これは叙事である。そのことによって死者を思い続けることができる。この感覚が抒情である。失ってしまった命への追悼、残された形見との触れ合い、亡くなった人に関する思い出。それらが詩や詩集の形で存在すること。これはその中で生命と再び出会うことでもある。

一般的に言って「命」ということを考える場合「儂い」「短い」「残酷」などのような言葉で表してしまいがちではないだろうか。しかし、ここまで読んできて山村由紀の詩集の中には、そのような文言が一切出てこないということに気づいている。水のように淡々と描かれていながら、平淡ではない。力づくよく訴えかけてくるものが感じられる。それが詩の中における生命との再会である。これらは補註18で触れている「あの日」の他にも、「ロバ」¹⁹⁾「夏ねむり」²⁰⁾「春の入院」²¹⁾等の作品の中に極めて強く感じられる。

中国語で「世界上最愛我的那個人去了」という言葉がある。「世界で一番愛してくれる人は去ってしまった」という意味である。筆者もこの言葉の意味がますますよく実感する年齢に近づいて来た。死とはいかなるものであろうか。生に関して言えば、母親はもちろん、本人自身が強く実感できるものである。年月を経るにつれて、心身ともに成長する。それとは死は異なっている。死は目を瞑った瞬時に、すべて終わってしまうのである。実感し得るのは周囲にいる人間のみである。

学校では生き方は教わっても死の本質を教わることはできない。死に関する教育はタブーであるかのようだ。しかし、死に関する教育を受けたことない人々であっても、詩を通して、つまりは日常風景の描写や大自然の描写を通して過去と出会い、過去の人物と出会い、生命の意義を悟ることができるのである。山村由紀第3詩集『青の棕櫚』は、詩を通して生命と再会することができるのだということも多く読者に教えてくれるだろう。

おわりに

本稿では山村由紀の3冊の詩集について分析・考察した。第1詩集『記憶の鳥』においては、「自然界へのアンテナを有していること」「時間の中に埋もれてしまった存在への目線が感じられること」という2つの特徴がみられ、それらは互いに緊密な関連を見せていた。第2詩集『風を刈る人』では前の詩集に見られた「時間の中に埋もれてしまった存在への目線」が「生命の挽歌」へと発展し、その思想が「日常風景へと潜入」し、いっそう現実的な舞台の中で命が悼まれる構造を読み取った。現時点での最も新しい詩集『青の棕櫚』の中では、「叙事から抒情への転換」「生命との再会」が見られた。この詩集では以前にもまして事柄が散文形式の中で詳細に描かれてゆくのだが、それは単に叙述として終ることなく、情を序するための手段として堅固に位置付けられているということが出来る。そして失われた存在について詠むことで、書き手も読者も「生命との再会」を果たすのである。

それぞれの詩集にはいずれも必ず何らかの意味で失われた存在が登場する。詩人はあらゆる手段で、あらゆるところで、その何ものかの行方を追いかけている。また現実の今と虚無の昔が織り込まれる中、全てのものとの再会を果たしている。「緑色」に吸い込まれる自然の中で犬との別れ、激しく揺らしても振り向いてくれない老婆、荷物からこぼれた誰かの名前、博物館に展示された化石の中に「住んでいる」古代海洋動物のアンモナイト、「薬が見つかったよ」と告げてももういない「あなた」、棕櫚の葉の影がびったり張り付いた叔母の顔など、全て現実には二度と見つけられないものである。大切な物事に去って行かれることを思うと涙があふれ出てくる。しかしこの詩集の中では誰も号泣はしない。というのは、失うことによる痛みは、一時的な陣痛ではなく、一生の旅に伴う鈍痛だからである。体の内部までこの渋くて重苦しい痛みが蔓延する。「詩好比害病不作声的貝殻動物所産的珠

子]（「詩は病気にかかっている、そして病気のことを誰にも教えない、一人で病気のことを抱えている貝から生まれてきた真珠のようなものである」²²⁾や「痛苦中開出一朵花」（「苦痛の中から花は開く」²³⁾という言葉がある。苦難を経験したからこそ、感慨はひとしおである。苦しいことを苦しいとは言わず、悲しいことも悲しいとは言わない。詩人の表現はさすがに隱晦曲折のものである。一見何気ない風景の中、胸を締め付けるような力が潜在している。読者の心は「傷んだ貝から生まれてきた真珠」や「苦痛から咲いてきた花」に揺さぶられる。それを通して忘れかけた過去の記憶を蘇らせ、自分と向き合いながら、生と死に関する思索の旅に改めて歩み出せるのである。

日本における研修期間に出会った「詩」というジャンルを入口に、今後も文学研究の道に邁進してゆきたいと考えている。

補注

- 1) 2019年度科目「日本語表現法Ⅰ」では日本語の感性を磨く為、日本近現代詩のアンソロジーがテキストとして用いられていた。
- 2) 2006年 草原詩社刊
- 3) 「Lyric Jungle」は2000年前後『脳天パラダイス』シリーズという奇妙なアンソロジーを連続で刊行し、一人気を吐いていた平居謙と山村由紀が出会い、誌名に関する討議、メンバー集め、具体的誌面構想が始まり、共同編集の形で創刊された。「現代詩手帖」の難解さや「詩と思想」の土着性からは一線を画した新しい世紀の楽しい詩誌を謳って芸能出版の鹿砦社を版元として2001年に創刊された。
- 4) 2009年～15年。大賀二郎・堅田富貴子・水間敦隆らによって運営・編集されていた文藝同人雑誌。「志の会」より発行されていた。
- 5) 2016年4月創刊の詩誌。「風箋」メンバーに岩村美保子・河上政也・角野裕美・森田美千代らが加わりリニューアル創刊された。
- 6) 2001年 空とぶキリン社
- 7) 2006年 同上
- 8) 2013年 港の人
- 9) 本稿校正時期の2020年1月30日に新大阪のワシントンプラザホテルにおいて本人に行ったインタビューによる。
- 10) 筆者は自身のそのような体験を単に楽しかった思い出としてしか感じられなかった。しかし、山村は次のように描く。「踏みしめる草のささやかな抵抗力/踏みしめた後のゆがんだかたち/草がゆれると/表面の水滴もゆれて/にじむように隣の水滴と交じり合う/そうして再び離れるのを/しゃがんでじっと見つめる/水滴も離れる時/激しく震える」まさに詩人の筆と言うべきもので、身体の震えを強く実感し得る。草の踏み心地、表面水滴の合流、しづく落ちる時の迫力、それらが紙面越しに伝わってくる。繊細であるとともに力強さも感じられる。
- 11) 例えば先に述べた詩「満月」では最初、月の描写が先行する。しかしそこで書かれている「濁った月」というのは既に述べた通り、老猫の眼のことであって、それらは自然なかたちで入れ替わってゆく。その猫もおそらく、近い将来、失われた時間の中にのみ住む存在になる運命を免れることできないだろう。ちょうど「散歩」の詩の中の犬が緑の中に吸い込まれてゆきそのまま帰ってこないことと同じように。また詩「赤茶けた土 背の高い草」の中には「おばあちゃん/ジュース/のどか乾いたら飲んでよ」「おばあちゃん/振り向かない」「私は肩を揺らす/おばあちゃん/振り向かない」という切実な表現がある。「激しく揺らす/振り向かない」という描写からは必死に声を掛け、体を揺らすにもかかわらず返事も一切してもらえない存在の焦りが感じられる。「形を残した靴」だけ手に「握りしめ」おばあちゃんは既に「背の高い草」の後ろに姿を消して

しまう。この時運転手が来る。すぐ現実の世界に戻されたような読後感である。「私」は「近付いてきた運転手さんに」何かを言おうと思うが、まだ「草原」に佇んでいる「私」は「くちびるについていた赤茶けた砂をかみ砕く」ことしかできない。ここでも、存在は自然物に囲まれたまま時間の中に喪失する。

- 12) 「風を刈る人」に関しては、「風」を「刈る」というO(object 目的語)V(verb 動詞)構造にまず興味を持った。「刈る」ものは一般認識では「草」、例えば、除草などのような清掃活動、あるいは「農作物」例えば「稲」を「刈る」ような場合に用いる。「風」も「刈れる」ものであろうか。疑問を持ちながらも詩に入った。「枯草だらけの原っぱ」で、語り手は「強い風が吹くごとに」「髪はみだれ腕は痩せ」「死んだ犬の名前」を繰り返し呼び続けた。風の中何かを追いかけて求めることの徒労感と喪失感。犬はもう二度と戻ってこないだろう。風を刈るのかそれとも風に刈られているのか。風は軽くもあり、重くもある。強風があり、微風もある。目に見えない、手では触ることのできない自然現象である。しかし、奇妙に一番感受しやすいものでもある。風は空気から成り立っているというように考えると、人間が生きてゆくために不可欠なものでもある。風は昔から常に吹いてきた。語り手はこの「風」の中、失ったものを探し求めている。
- 13) 詩「臨海学校」では小学生が海に飛び込みたいとはやる気持ちを抑えながら、ラジオ体操をする場面が描かれている。活気が砂浜に溢れている。ところが一転「海の側には死んだ人」と書かれる。海の中に漂う、失われた魂への挽歌が唐突にここに出てくる。
- 14) 詩「星の一生」は「理科室」の電気を消し、スライドで「星」の一生を遡るシーンで始まる。「むくれた星は一瞬消える」。理科室に外の光が入り込むことで星の生命が「終わった」。暗幕を開けたばかりの眩しさの中で「あふれる光をかき分けかき分け/ねえ、ねえ、と/ヒトのようなモノのようなそれに向かって/ただひたすらに/語りかける」。まぶしくて、クラスメートの姿を人間とは思えないだけなのだが、読み方によっては命が消えた向こうの世界に思いを馳せているかのようにも読むことができる。
- 15) 「梅雨」の中に「雨/頬/地面/点/空にむけ/いっせいに/ほどかれる/傘」という表現がある。雨が降り出した瞬間、人々がいっせいに傘を開く日常風景である。簡潔だが非常に力がある。尋常のようであるが、実は尋常ではない青白く美しいハーモニーが見出せる。この詩の中には挽歌的なニュアンスは少ないが、詩集全体の日常性を高める効果を担っていると言える。
- 16) 「波の音」は涙を誘う作品である。闘病生活をする「あなた」との日常的な風景が描かれている。「寝返り」で私は「目が覚めて」、覚めてから、あなたは寝る前と比べてまた痩せてしまう。「痛い」「痛い」というあなたは「鎮痛薬」を求めに行く。しかし、そこに置いていたはずなのに、棚に置かれている籠のいくつかを探したが結局、どこにもなかった。「戸を開いたり閉じたり開いたり/閉じたり閉じたり閉じこもってしまったり」する。あなたは「そのたびに」さらに「痩せていった」。探してあげようと思っているが、なかなか「あなた」に接近することができない。もう少しで辿り着けそうなところだったのに、辿り着けない。手が届きそうで届かないことの悲しさと悔しさは極めて大きい。やっと薬が手に入って「白い薬が二錠 私の手のひらで光る」。「飲んで」と言った時には、もうわたしとあなたとの距離は途方もなく離れている。どちらがリアルでどちらがバーチャルなのか区別がつかなくなってしまうような描写である。返事を待っている「私の姿」、去ってしまった「あなた」の姿は人を悼む哀しみに近い。
- 17) 「家族」は父の「設計図」が見つからなかったため、家の階段はずっと「作りかけ」の状態であるという不思議な作品。「地面がゆれた」という詩句を読むと地震を想起したが、実は花の「芽」が芽生えたからである。「誰かに穴を掘ってもらい/土にはまり込んだ身体は/死んでからも伸びるのです」土の中埋められた人の体が伸びたから家が揺れるのか。悲しい読後感が残る。詩と死がこれほどにまで近いのかと感嘆する。「裾」の中折り込まれた「父の設計図」はやっと見つけられたが、父に知らせに「階段にまで走り寄ると」、「あたりには」もう「誰もいない」。いつか、いつの間にか、「私たち」はついに「私」になった。これはまさに人生の旅である。列車の旅のようなもので、最初から一緒に乗っていた人が途中下車してゆく。同乗の人が次々に去って、「私たち」の「たち」はなくなる。ここにも挽歌の発想が日常に潜入してゆく構図が強く見られる。

- 18) この作品を読む限りにおいては、語り手と叔母との強い心的繋がりとはどのようなものであったのかは判然としない。しかしこの作品に続いて詩集に収載されている詩「あの日」は大きなヒントになる。幼いころから詩人は叔母に可愛がられ、いろいろな共有体験をしているのだ。作品中にも「水族館へ連れて行ってくれた」叔母さん、イルカショーと一緒に楽しんだ叔母さん、ペンギンの登場を待ちながら、陽射しの中笑って拍手した叔母さん、さまざまなシーンが描かれている。しかし、シーンの描出は自己目的ではない。すべては「あの日」に止まってしまった叔母への強い思い(抒情)を乗せて運ぶ役目を果たしている。
- 19) 詩「ロバ」にはこれまでの詩集にも登場する「妹」の思い出が描かれている。おまけが好きな妹は、いつもおまけがついているお菓子を買っていた。その時おまけが「馬」だと思って喜んだのもつかの間、実は「ロバ」に過ぎず、妹は急に興味を失って放り出してしまうという内容の作品である。その「ロバ」は今でも家のどこかに置かれている。その鳴き声は今も消えてはいなかった。私の頭の中、眠りの中、まばらな星空の下で鳴いている。詩「ロバ」の中で詩人は、今では会えない当時の「妹」と「再会」しているのではないだろうか。
- 20) 「夏ねむり」の詩では、真夏になると土鍋は使えなくなるため、物置き場に放置されてしまう、という題材が描かれる。「土鍋の中は空っぽ」ではない、「ふゆのくうきが入っています」と詩人は描く。何も残っていないのではなく、一緒に使ったときの喜怒哀楽の空気が入っている。これを使うたび、また一緒に居た時の思い出が浮かぶだろう。また巡り合えるだろう。だから「ふゆになれば ふゆになれば」と再会を「くりかえして夢見る」のである。
- 21) 「春の入院」には入院生活の一端を垣間見ることができる。作中、「かなり化膿していると/39℃の高熱で朦朧とした頭は告げられ/導かれるままに/レディース病棟の個室に入院する」人もいれば「新生児を抱いた若い華やかなお母さんたちの群れ」もある。あの世への旅に立つ人もいれば、新しく誕生してきた人もいる。生と死が複雑に絡み合う中、形の違う生に再度、出会う。
- 22) 中国の作家の銭鐘書が1980年に訪日した折、日本早稲田大学文学教授懇談会において発表した文章「詩可以怨」(詩で怨恨できる)の中でオーストリアの劇詩人・フランツグレルパルツァーの言葉として述べたもの。
<https://baike.baidu.com/item/%E8%AF%97%E5%8F%AF%E4%BB%A5%E6%80%A8/4995467?fr=aladdin> 参照。
- 23) 中国の女性作家張愛玲の名言「遇见你我变得很低很低、一直低到尘埃里去、但我的心是欢喜的。并且在那里开出一朵花来。」(あなたと出会ってから、私はあなたからの愛を乞う人になりました。すべてのプライドを捨てた私は、埃だらけの世界に置かれてしまうまで、あなたからの愛情を祈願しています。一瞥さえしてもらえなくても、やっぱりあなたのことをぞっこんに愛しています。そして、そこからお花が咲いてきます。日本語試訳/鄒乃馨)詳細は以下のURLを参照されたい。
<https://baike.baidu.com/item/%E4%BD%8E%E5%88%B0%E5%B0%98%E5%9F%83%E5%BC%8C%E5%BC%80%E5%87%BA%E8%8A%B1%E6%9C%B5/586179?fr=aladdin>

A Journey in the Search of *Existence Buried in Time*:
Decoding Poetry of Yuki Yamamura in *Kioku No Tori*
(the Memory Bird), *Kaze Wo Karu Hito* (the One
Reaping the Wind), and *Ao No Shuro* (the Blue Palm)

ZOU, Naixin

This paper analyzes three poetry collections—*Bird In Memory*, *The Man Harvesting Wind* and *Green Palm* of Japanese poet Yuki Yamamura. The poetry collections described the seemingly ordinary life scenes and natural scenes in a refined language. But in the ordinary, it reveals several extraordinary characteristics. In the description of the present reality and the illusory past, we can see the past that the poet searching for. At the same time, through the analysis of the three poetry collections, the author has a look at the life and growth of poet, and further understands the attitude of life and death concept conveyed in the poem.

Keywords: poetry collection, ordinary, extraordinary, the past, life and death